



令和5（2023）年度 なはーと文化芸術事業
地域芸能と地域コミュニティに関するヒアリング 報告書

目次

事業趣旨・まとめ

那覇市A地域

継承者(女性・20代) /2024年2月8日ヒアリング	P8
保護者(女性・50代) /2024年2月8日ヒアリング	P10
地域芸能演者(男性・50代) /2024年2月16日ヒアリング	P14
地域コミュニティ関係者(男性・60代) /2024年2月22日ヒアリング	P19
学校関係者(女性・50代) /2024年2月28日ヒアリング	P23

那覇市B地域

継承者(女性・20代) /2024年3月5日ヒアリング	P30
保護者(女性・40代) /2024年3月5日ヒアリング	P35
地域芸能演者(男性・60代) /2024年2月27日ヒアリング	P38
地域コミュニティ関係者(男性・50代) /2024年3月5日ヒアリング	P42
学校関係者(男性・50代) /2024年3月12日ヒアリング	P48

令和5年度 地域芸能と地域コミュニティに関するヒアリング調査事業

○事業趣旨

那覇文化芸術劇場なは一と(那覇市文化振興課)は、那覇文化芸術劇場なは一と条例において「地域の活性化」を設置目的の一つとして掲げていることから、昨年度、那覇の地域芸能とそれを支えてきた地域コミュニティの現状把握と課題解決に向けた取り組みとして、令和5年3月に「地域芸能と地域コミュニティ 現状と今後の課題」というシンポジウムを開催いたしました。

今年度は、当該シンポジウムを踏まえ、多様な立場にある当事者がそれぞれに感じる課題などを実際にお伺いし、現状の把握と課題の整理を目的に、地域の芸能やコミュニティに携わる方へのヒアリング(インタビュー)調査を行いました。

○昨年度から今年度にかけての経緯

昨年度のシンポジウムにおいて、「地域芸能と地域コミュニティ」の現状や今後に向けた課題を紐解くポイントとして見えたのは、以下の3点でした。

- ・「演舞の場」(演者が地域芸能に継続して関わる発表機会として)
- ・「地域コミュニティ」(地域芸能団体運営や継続的な継承の場として)
- ・「学校」(後継者との出会い、育成や発表の場として)

今年度は、これらのポイントを踏まえ、学校・自治会・小学校区まちづくり協議会・地域芸能演者(次世代に繋げる側)・若手演者(次世代側)・若手演者を支える保護者を対象者として、ヒアリングを行いました。テーマとしての地域芸能は、旗頭に焦点を当て、比較して考察することのできるように、那覇市の2つの地域で実施しました(個人情報保護の観点からヒアリングの記録は匿名とし、個人や団体を特定できる情報についても省略しています)。以下、今回のヒアリングで得た多くの情報を、上記3つのポイントに即して要約し、今後について考察いたします。

○ポイント1:「演舞の場」(演者が地域芸能に継続して関わる発表機会として)

地域芸能団体は、当然ながら、ただ稽古だけを重ねているのではありません。地域行事、イベントといった本番への準備として稽古を行なっています。ヒアリングでは、「コロナ禍は大変だった。本番がないと稽古で集まる必要がなく、必然とメンバー同士のコミュニケーションが少なくなった」とのお話や、コロナ禍の影響がない時でも「旧暦に合わせる地域芸能は特有のオフシーズン(行事やイベントが少なくなる時期)がある。その期間は稽古がないため、必然的にメンバーと会わなくなる」とのお話がありました。

発表機会の喪失は、コミュニケーションの希薄化を生み、発表のない期間が長くなると、メンバーが離れていく一因になりうるという問題が生じることが確認されました。

発表の場がコミュニティ維持機能を持つということと、発表機会の喪失は団体の運営・維持を難しくするという課題が、地域をまたがった共通事項として見えてきました。

課題への対応策としては、オフシーズンにバーベキューなどを行い、メンバーが集う時間を増やし、懇親を深める期間に充てるなどの検討や、比較的若年層に人気のあるエイサ

一を青年会で新設し、旗頭の稽古がない期間にエイサーを行い、新規加入を狙う、などの工夫を行なっている地域がありました。

しかしながら、単に演舞の場を増やせばよいのかというと、そう簡単ではありません。それによって生まれる負担も当然出てきます。地域芸能団体は、演舞だけで生計を立てる、いわゆるプロの集団ではありません。本番が増えると必然的に稽古時間の負担も増え、仕事をもちながら地域芸能に取り組んでいる演者が多い現状を踏まえると、「演舞の場」をただ増やすだけが最適解とは言いづらい現状を見て取ることができました。

それでも、「演舞の場」は地域芸能団体にとって、全て(団体の団結、維持、個人のモチベーション、演舞する意味の認識)の根本に繋がっていることを考えると、課題を踏まえた上で「演舞の場」の効果的な活用を考えていく必要がある状況を認識することができました。

○ポイント2:「地域コミュニティ」(地域芸能団体運営や継続的な継承の場として)

地域芸能団体を運営していく上で欠かせないのが、地域コミュニティとの繋がりです。

自治会と地域芸能の関係は長い歴史を有しています。かつての村や部落が自治会になり、その村や部落の繁栄を願う祭祀などで演舞した地域芸能が、そのまま自治会の管轄に引き継がれているケースも多くあります。そのため、自治会行事である地域の祭祀、お祝い事、夏祭り、敬老会、観月会などの参加が地域芸能活動の軸になり、その活動を通して活動資金や運営資金を自治会から受けているところがほとんどになっています。

今回のヒアリングからも、地域に根ざしている芸能をバックアップし、盛り上げようという強い気持ちを地域コミュニティから感じるすることができました。しかしながら、地域コミュ

ニティも地域芸能と同じく大きな課題に直面していることがあらためて認識されました。
とりわけ人材不足が最大の問題です。不足している「人」には、芸能や行事への参加者、演舞の後継者、その他にも幅広い役割を担う方々が含まれます。

今回のヒアリングの事例で言うと、自治会組織の中に、年齢等によって階層を分けた様々な会が存在しているというケースがありましたが、人材不足のために、同じ方が複数の組織で複数の役割を重複して担っている現状があり、自治会から一人メンバーがいなくなると、一気に複数の役割に空白ができてしまうという悩みを抱えている場合が確認されました。その空白を穴埋めするのも容易ではありません。また、地域芸能に直接に関わる人材減も顕著で、かつて自治会が担っていた旗頭のちんく隊事務局も、担当者の高齢化と手伝う人数の減少でできなくなったというケースを伺いました。

また別の地域の事例では、自治会以外にも地域コミュニティに関わる団体が複数存在しており、一見活発に見えるものの、実際にはどの団体も同じようなメンバーで構成されているのが現状で、多様な視点から多様なアイデアが生まれにくい、という悩みがありました。

地域コミュニティにおいて、事務局の不在や多様な視点の欠如は、最終的には組織力および地域活力の低下を生み出しかねません。コミュニティの衰退は「演舞の場」の喪失や地域芸能団体の運営、活動資金とも直接的に繋がっているため、必然的に地域芸能の衰退も引き起こすおそれがあります。そうならないために、場合によってはこれまでのコミュニティの運営の仕方を時代の変化に合わせて見直しながら、新しい枠組みで人材不足の解消を目指すことが、取り組まねばならない喫緊の課題の一つとして、ヒアリングから認識されました。

○ポイント3:「学校」(後継者との出会い、育成や発表の場として)

上記2つのポイントは、関係者であれば、以前からある程度見聞きした状況だったかと思いますが、地域の関係者でも必ずしも接する機会のない学校との関係性については、時代の変化に伴う課題を抱えながらも、同時に大きな可能性も感じられました。

地域芸能にとっての難しさとしては、学校で進められている働き方改革があります。あまりに多忙な教職員全体の業務の見直しが行われています。那覇の小学校と中学校の多くは旗頭フェスタを通じて地域芸能に関わっていますが、ヒアリングでは、旗頭フェスタは様々な負担にもなっているというお話を伺いました。放課後の稽古は教員も見守らなければならず、それが数週間続き、本番では朝から生徒に付き添う必要があるため、先生方の負担になり、しかもそれをボランティアで行うことが状況を難しくしています。学校側は、働き方改革を通じて、これまで以上に多くの時間を生徒と向き合うことに使いたいと考えているため、学校での業務に加えて地域芸能に関わる時間を捻出することは極めて難しいというお話でした。

他方で、子供たちの通う学校に地域芸能の入り口がある状況は、地域芸能にとって大きなメリットを生んでおり、それは今後さらに重要になりうるようにも思われました。若手演者からは、「小学校の旗頭フェスタで旗頭と出会い、そこからのめりこんでいった」というお話を伺いました。子供がのめり込むと、保護者の大きな応援に繋がってきます。個人差はあるかと思いますが、ヒアリングをした保護者の方も、「稽古の送迎やその他の協力は、自分にとって全く苦にならなかった」と楽しそうに話をされていました。別の保護者からは、「旗頭を通じて子供が青年会に入り、そこから自分も自治会を知り、自治会に入った」と伺いましたが、このエピソードも大切なポイントを示しているように思われました。学校の旗頭がきっかけとなり、そこから青年会、さらに自治会、というルートがあることは、地域にとって一つの重要な流れになりうるのではないのでしょうか。地域芸能が、自治会さらには

地域のコミュニティを強化することに繋がりうる、という一つのモデルになっているから
です。

今回のヒアリングでは、教員の負担をさらに減らしたいという学校側の切実なお話が聞
けたことは重要でした。その声を地域にとってのマイナスと受け止めるのではなく、互い
の課題や負担を軽減し合い、解消し合うことができれば、地域と学校の連携の仕組みが生
まれる可能性になるからです。地域芸能にとって、学校との効果的な繋がり、出会いと
育成という面からも極めて重要であり、地域コミュニティにとっても、学校との接点は保
護者世代との接点に発展しうるものです。ヒアリングからは、学校と地域のそれぞれの役
割を明確にして、両者を繋げていくような環境整備が求められており、それが地域芸能と
地域コミュニティの双方を強化することにつながりうる、という認識が得られました。

○まとめ

今回のヒアリングを通して、現在必要とされているのは、発表機会のさらなる拡充とい
うよりは、地域芸能の演者、継承者、保護者、学校、地域コミュニティが連携し、互いのリソ
ースを提供し合うことによって、互いの負担を今よりも軽減し合い、全体をより効果的、効
率的に循環させていくことのできる仕組みではないか、という認識が得られました。

卒業記念に芭蕉紙づくりに取り組む小学校があるように、子供たちに地域の文化や歴
史を知ってほしい、伝統を担ってほしい、地域芸能の体験を通じて豊かに成長してほしい
という願いは、どの地域の学校であっても共有されているのではないかと思われました。
しかし教員も地域も全てを負担することはできません。そのとき、地域が学校に指導者を
派遣して、継承者を育てるというように、互いに負担を軽減しながらメリットを得ることは、

決して不可能ではないと感じられました。その際、異なる立場をつなぐ「地域コーディネーター」のような存在の必要性が、今後に向けた課題として、ヒアリングでは提起されていました。

【那覇市 A 地域】

【次世代継承者へのヒアリング】

令和 6 年 2 月 8 日

インタビュアー：西平博人／長嶺一輝／平岡あみ

インタビュー：地域芸能継承者(女性・20 代)

(1) 地域芸能に携わることになった経緯・変化

旗頭を始めたきっかけについて

Q

旗頭を始めたきっかけについて教えてください。

A

小学校 6 年生の時にこども旗頭をやろうという声掛けがあって、参加しました。旗頭フェスタや小学校運動会に出場したりしているうちに、学年も上がり中学生になると青年会に入りました。

軽いノリで始めた旗頭でしたが、持てたときの達成感や、他の同年代の子たちとの競争意識は強かったような気がします。もっと上手に持ちたいという気持ちがモチベーションにつながっていった感じです。

Q

旗頭を辞めたいと思ったことはないですか？

A

ないです、練習日以外にも練習していました。高校に入ると、部活をしながらだったので練習に行くのがめんどくさいなという日はありました。

旗頭を通して知る地域のことについて

Q

旗頭をはじめから、地域の歴史や文化に親しむ機会がありましたか？

A

小学校のときに指導をしてくれたのが、地域の青年会だったので地域の祭りや綱引きに参加させてもらいました。それまで地域の祭りには参加したことがなかったので、綱引きがあるということも初めて知りました。また、そこで青年会の方から技術指導をもらったり、歴史の話聞いたことはよかったです。

旗頭を地域芸能として続けてこられた理由について

Q

11年間続けられている理由はありますか？

A

先輩方から、いろいろな話を聞けるということが大きいです。旗頭そのものの作り方や、小道具や大道具に関する技術的な話も勉強になります。

(2)地域芸能の継承に関する課題と展望

地域芸能を守る気持ちについて

Q

所属している青年会以外に、地域芸能に携わっていますか？

A

高校では郷土芸能部に所属し、大学では三線を専攻しています。

高校では三線やエイサー、獅子舞、舞踊のほか、大道具や小道具を作るなど、幅広く芸能に関する経験を積みました。青年会に卒業生が多かったことから、芸能を学べる高校への進学を決めました。そこで学んだことは、地域で芸能を続けるモチベーションにもつながっています。芸能をやっているとゴールは無いと思っているので、一生追い続けたいといけないう想いがあります。

同年代の参加者について

Q

地域芸能では継承者不足が課題になっていますが、青年会に同年代はいますか？

A

青年会に入った当初は、同級生は 3 名くらいでした。現在は1名がたまに顔を出す程度です。高校を卒業して仕事で県外へ行ったりしてなかなか参加できなくなります。青年会はほとんどが自分より上の年代です。下の年代は高校生が 3 名くらいです。新型コロナウイルスの影響でイベントが全部中止になったり、集まれなかったことも大きいと思います。また、昔は小学校で地域の旗頭をあげていましたが、現在は運動会が簡素化され、参加していません。

(3)地域コミュニティとのつながり

地域芸能に対する自治会などのコミュニティの役割について

Q

地域芸能や自治会に対して、今の世代から見た問題点や要望はありますか？

A

どのように人を集めるかは大事だと思います。SNSやポスターを使って活動の情報を発信したり、工夫をしています。また、芸能に関しては発表の場がもっとあるといいと思います。1月の成人式が終わると、7月までイベントがありません。イベントがないと、人が離れていきます。イベントや練習が多すぎても大変で続けられなくなってしまうということもあるのですが。最近では、先輩たちと何もない時期は餅つき大会などのイベントをして、遊びに行く機会をつくって集まるっていうのもいいのではという話をしました。

地域とのつながりを持つことについて

Q

旗頭を通して自治会を知ったとのことですが、地域のつながりを感じることはありますか？

A

地域で歩いていると、知っている人から挨拶をされたりします。草刈りの行事に参加したりもしています。最近では、なかなか地域活動に行けていないのですが。

【次世代継承者の保護者へのヒアリング】

令和6年2月8日

インタビュアー：西平博人／長嶺一輝／平岡あみ

インタビュイー：保護者(女性・50代)

(1)地域芸能に携わることになった経緯・変化

地域芸能に関わるきっかけについて

Q

お子さんが旗頭を始めたのはいつごろですか？

A

小学校6年生のころ、友人に誘われて旗頭を始めたと思います。旗頭に参加すると聞いて、子供がやりたいことはある程度させようかと思っていました。いろんなことに挑戦してほしいので、できるならやったらという軽い感じでした。旗頭がどんなものか、どのくらいの重さを持ち上げるのかなど全然知りませんでした。本人は、もともと内気な性格だったので、これをきっかけに変れるかなという期待もありました。

Q

それまでは他に習い事はしていましたか？

A

文化系のことはしていませんでしたが、少年団のテニスは小学校 4 年生から通っていました。

Q

地域芸能への参加によって、子供自身の意識に変化はありましたか？

A

やはり、一人で旗を持つというのが自信につながったのか、それからは少しずつ人前になるようになり、何か意識が変わったような気がします。

練習時間について

Q

保護者としての送迎などがあると思いますが、地域芸能の練習が夜の時間帯になることについてご意見はありますか？

A

私自身も地域や青年会に関わっていますし、皆さんも仕事が終わってからの練習時間ですから、なかなか子供たちに合わせるというのは難しいと思います。子供が行きたいという気持ちを考えると、特に気になりませんでした。

Q

お子さんは中学校から青年会に参加するようになったのですか？

A

本当は青年会は高校生から入れるのですが、特例で入れていただきました。小学校までは学校の旗頭、中学校からは青年会に入って旗頭を持たせてもらっていました。

自分自身に関わるようになったきっかけ

Q

ご自身が旗頭を持つようになったきっかけは何ですか？

A

まさか自分が持つとは思っていませんでしたが、子供の旗頭を持つ姿にアドバイスを送っていると、実際にどれほど重たい旗頭を持っているのかという疑問から、自分も持ってみたいと思いました。

周りを見ていると、父親が旗頭をしていて、子供達も始めるという形が多いと思います。昔ながらの考え方が残っており、女性には持たせないという地域もあると聞いています。青年会には快く受け入れてもらいました。

Q

青年会には、元々女性が所属していましたか？

A

元々いらっしゃいました。私の子が女性としては4人目で、私が5人目です。

(2)地域芸能の継承に関する課題と展望

保護者として、今後の課題や問題点について

Q

地域芸能の継承について、今後の課題についてご意見はありますか？

A

様々な家庭があるので、例えば子供が多い家庭では大変なこともあると思いますが、送り迎えだけでも協力するなど、子供が何かに頑張っている姿を見てほしいと思います。また、本番はぜひ見に行ってほしいですね。

高校卒業後に地元から離れることで芸能からも離れてしまい、一番必要な年代が少ないということは課題です。ただ、中には後々戻ってきて、また関わるということもあります。子どもの頃に関わっているかが重要だと感じています。

Q

他の保護者から意見を聞いたことはありますか？

A

やはり子供の帰り時間が遅いので、なかなか理解を得られないこともあるようです。練習は夜8時から10時までの2時間ほどですが、練習後は片づけなどをするため、帰宅時間が11時を回ることもあります。

Q

稽古場から距離のある所から通っている方もいますか？

A

はい、別の地域からも来ています。

子供の送迎の連携について

Q

保護者同士で送迎の連携をすることはありますか？

A

やろうと試みたことはありますが、なかなかうまくいかないです。親同士の連携があれば、連絡を取りながら負担を分けられそうですが、当番制にするわけにもいかないし、難しいですね。

旗頭に限らずエイサーでも同じですね。

(3)地域コミュニティとのつながり

自治会活動について

Q

自治会との関わりを持ったきっかけは何ですか？

A

子供が旗頭を始めたからです。私は現在住んでいる地域とは別の地域の出身なので、旗頭を始めたことで、自治会を知りました。今では草刈りや地域の神事にも参加しています。

地域芸能と地域コミュニティの関係性について

Q

地域芸能と地域コミュニティはどのような関係性が望ましいと思いますか？

A

地域芸能や自治会活動に興味を持って、参加するために誰に聞けばいいかわからないということが今後の課題だと思います。

また、自治会の中にある子供会から老人会までが連携がとれている組織づくりも必要だと思います。現状ではそれぞれが単体で活動しているので、お互いに顔みしりになれるようなイベントなどがあってもいいですね。その軸に、地域芸能がなれると良いと思います。

自治会活動に参加する心理的なハードルについて

Q

自治会の活動に参加することにハードルを感じている人もいますか？ 行事があるので、なかなか踏み切れないこともありますか？

A

地域芸能を入口として、自治会の活動を知ると入りやすいかもしれません。芸能の行事を通して、必然的に地域の人顔が見えてくるので。

ただ、芸能には興味あるけど、自治会の活動には興味がないという人もいて、そこをどのように繋げていくかというのは自治会の課題だと思います。

Q

この地域の青年会は、昔ながらの雰囲気ではなく、自主性を尊重しているように感じます。

A

半強制的な雰囲気があれば、高校卒業後にやめてしまうなど、続かないと思います。高校卒業後に地元から離れて、気持ち的にも離れるけど、地元のためにやりたいと戻る人もいますので、

そういうことも大事なかなと思います。でも、一番欲しい年代が離れるというのは課題かなとは思っています。

【地域芸能演者へのヒアリング】

令和6年2月16日

インタビュアー：西平博人／長嶺一輝

インタビュイー：地域芸能演者(男性・50代)

(1)地域芸能に携わることになった経緯・変化

地域芸能に関わったきっかけについて

Q

地域芸能に関わったきっかけは何ですか？

A

地域の出身者として、地域を盛り上げるために関わりました。私自身も子供のころから、先輩方と交流を深める中で、地域の行事や活動に携わるようになり、地域の誇りを感じると、自然な気持ちで、同世代の仲間と集いながら当たり前のように関わるようになっていきました。

先輩たちがそうだったように、地域芸能の棒術をしたり、豊年祭で旗頭をやったりということを見てきたので、きっかけがどうだったかというよりは、ここに生まれ育ったから当たり前という感覚です。もちろん、この地域から県外へ出ていく者も多いですし、私の同世代も今関わっているのが2～3名です。他の地域に住んでいる方もいますが、もともとの地元の方は、声をかけたら集まってくれますので、行事を運営するために非常に助かっています。

私が30代後半の時期に、「エイサーを始めて若い人を集めたい」という声があり、自治会の予算を組んでもらい、大太鼓・締め太鼓・衣装など作ってもらって立ち上げたこともあります。現在は、伝統芸能保存会のメンバーが35名ほどいます。18歳～80代で運営していて、行事ごとに集めますが、声をかけるとだいたい10名～15名ぐらいが集まってもらえます。皆さん仕事や地域外のつきあいもありますのでお互い日程を合わせながらという感じです。

(2)地域芸能の継承に関する課題と展望

地域行事や芸能を支える団体について

Q

地域行事に関わる団体について教えてください。

A

自治会として、地域の中で青年会(～30歳まで)・中健会(31歳～55歳)・壮健会(56歳～70歳)・健老会(71歳以上)・婦人会(女性・70歳まで)という形で集まっています。地域にはこのような組織があるので行事ごとに人を集めて、新年会・餅つき大会・成人式などで棒術、獅子舞の演舞を披露するために、前週から打合せと練習をするなど定期的に集まっています。

Q

伝統芸能保存会について教えてください。

A

伝統芸能保存会は、地域行事に関わる上記の組織体とは別です。もちろん、メンバーはそれぞれ重複していますが、旗頭や棒術などの演者は35名ほどが保存会に加入しており、青年会～健老会の集まりとしては50名を超えていると思います。

地域芸能や行事への参加について

Q

地域芸能や行事の参加者については減っているように感じますか？

A

減っているというよりは、昨年より2、3名増えています。ただ、参加できない人もいますので、なるべく連絡は取るようにしています。LINEだと既読で確認できるので、なるべく音信不通にならないように心がけています。

各行事や活動に対する予算について

Q

予算は自治会から支出されているのですか？

A

年度初めに自治会から各組織に補助金の分配があります。加えて、演舞によって発生した報酬は活動資金にしています。その報酬で、演舞出演や行事の片づけ後に公民館でオードブルなどを注文して打ち上げをするなど、コミュニケーションの場を積極的に作っています。

自治会行事について教えてください。

Q

自治会の年間通してのスケジュールは？

A

1月に成人式、新年会。2月がとっしびー、5月がこいのぼり、グランドゴルフ大会。7月と8月は豊年祭、盆踊り。9月は十五夜、10月は那覇大綱挽、合同祝い(カジマヤーなど)、11月

は友遊会。12月 は忘年会といったスケジュールです。

今年は、桜祭りにも演舞で呼ばれましたが、いろいろ忙しくてお断りしました。依頼が来たときは、LINEで連絡をとって、人数が揃って恥ずかしくない演舞ができれば出演しますが、そうじゃない場合はお断ります。部落行事が重なるときは行事優先です。

1年を通して行事が入っているので、メンバーが顔を合わせる機会が多いです。

練習日程や時間について

Q

練習日程や時間について何か工夫していることはありますか？

A

私達が若手のころは、21時～23時ぐらいの間に練習していました。古くからこのエリアに住んでいる人は特に苦情などはないですが、新しいアパートが増え、住人の入れ替わりも激しいので、地域の変化も考慮し、練習時間を20時～22時ぐらいまでに設定して、管理しています。参加者の生活リズムも整えながら、地域からの苦情にも対応しています。

地域芸能を運営する課題について

Q

地域芸能を運営する上で課題として感じていることはありますか？

A

一番の課題は後継者です。しかし、欲しいと思ったところで集まるものでもないですし、女性にチンク隊に参加してもらうなど間口は広げています。10代の高校生がまだまだ少ないので、エイサーを起ち上げることで巻き込んでみたものの、だからといって地域芸能(棒術、獅子舞、旗頭)まで興味を広げられるかという、そうはならないのが実情です。

また、エイサーを演舞することが目的で習いに来ている人たちに、自治会行事やその他のことをお願いするのもおかしいですし、難しいところです。

Q

人を集めるために、働きかけは何か工夫していますか？

A

以前は、地域の家を1件1件回って案内したことはありますが、どうしても断られてしまいます。十五夜やとっしび一演舞を見て自分もやりたいという人はいましたが、毎年そうかという、なかなかいません。今年も「4-5名は若い人が入ってきたね」とはならないので、参加してくれた人を維持するだけでも難しいです。

Q

現状の参加人数が減っていくということも考えられますか？

A

減るというか、この人数はそのまま維持されると思います。しかし、そのまま私達も高齢化していき、獅子舞を演舞できるかといわれると、難しくなると思います。

旗頭フェスティバルに参加した小中学生のうち、高校生になっても旗頭に関わる人がいるので、同じように棒術や獅子舞などにも興味を持ってくれたらいいなと思います。

県外へ進学した子が、夏休みで帰省して、地域行事に参加してくれるということもあったので、地元へ何かしたいと思う若い人がいることは嬉しいです。

Q

地域芸能に関わるきっかけとして、演舞を見たり体験したりというのは大事な入口ですね。

A

それは、間違いなく重要だと思います。地域のまつりも今は実行委員長がいないから実施できていないですが、会場に行けば子供たちが「獅子舞は何時からですか？」と聞かれるということもありましたので、興味を持つきっかけにはなっていたかなと思います。

(3)地域コミュニティとのつながり

若い人たちとのコミュニケーションについて

Q

若い人たちに伝えたいものはありますか？

A

私は話をすると熱くなるタイプなので、若い人にはなるべく直接的に声掛けしないようにしています。基本的には、自分が教えるというよりは、周りにいるみんなで教えていきながら、必要などころだけ、話し合いながら教える感じです。伝統とは？といった昔話はなかなか伝わらないので、子供たちがなるべく委縮しないように気を付けています。徐々にお互いの距離を詰めていながら大事な話をしています。

自身の教えられていた時と比べてどうか

Q

ご自身が次世代の立場だったときは先輩からどのような引継ぎがありましたか？

A

引継ぎというか、そもそも今と違って曖昧なことが多かったです。ひと世代前の先輩方は、口伝なので振りや型が教える人によって異なる場合もありました。そこで棒術の型決めをするために26、7年前に伝統芸能保存会を発足しました。

その際に、自治会を通して教えてもらえる人を探していましたが、その話を聞いた他の先輩の中には快く思わない人もいたと思います。しかし、伝統芸能保存会として、地域芸能を守ろう

と考えると私が中心に始めたことなので、しっかりと話し合いながら少しずつ理解してもらった結果、「後は任せる」という雰囲気を作れたと思います。そのような流れが作れたので、後輩にもあいまいな指導ではなく、しっかりと伝えることができるようになりました。

口伝だとそれぞれの想いが入るので、基本的な型は一緒だけど細かい所作の部分で一致しないことが多く、なかなかうまく伝わっていなかった。これは本当にいろんな先輩方にいろんな言い分があって大変でしたが、その当時の僕ら若いメンバーが一生懸命に取り組んでいることなので、当時の大人の方々が間に入って、任せていこうということで話をまとめてくれて今に至っています。

Q

旗頭も同様のことがあったのですか？

A

旗頭は持ち方について他のシマ(地域)と違いがありました。これは、ある時にわかったことなのですが、僕たちだけ持ち方が違って、理にかなっていないことがわかり、持ち方を変えようとなったことがありました。これも先輩方からいろいろ言われましたが、統一していきました。

昔は、自分のシマ(地域)が一番という意識が高かったけど、今後継承して残していくためには、ちゃんと理にかなっていることは受け入れなければということで、みんなで考えてきました。僕がリーダーとして権限をしっかりと活用しながら、先輩や周囲のみんなに納得してもらい、任せてもらうということは大事なことだと思います。

次世代の地域リーダーについて

Q

下の世代には、リーダー的な役割の子供達は育ってきていますか？

A

青年会長は、エイサーを入口に若い子たちが入ってくることを期待しているようで、ここはあまり口を挟んでもできることは限られるので青年会長に任せています。

30代～50代のメンバーは同じ気持ちでやっていますが、10代～20代の若い子たちが入ってこないことには、なかなかリーダーシップを発揮することもできないですから。自分自身としては、元気な限りずっと関わっていきたいと思っています。

地域の外の方が関わることについて

Q

地域芸能保存会の方々は同じこの地域出身の方ですか？

A

地域出身以外の方もいます。友人や知人に声掛けして、手伝ってもらっています。以前は、「出

身者以外に道具を触らせるな」などいろいろ言われましたが、今はそういう声もなくなり、地域の伝統芸能に関わるなら出来るだけ全般的に関わってほしいという話はします。旗頭は他地域に参加し、棒術、獅子舞だけこの地域でというのはお断りしています。

Q

以前は、地域の行事以外に出演するのは難しかったですか？

A

そうですね。結婚式なんかも「チャラチャラするところに行かせるな」と言われていました。でも、今はそういうことをいう人はいなくなりました。

【地域コミュニティへのヒアリング】

令和6年2月22日

インタビュアー：西平博人／長嶺一輝

インタビュー：地域コミュニティ関係者(男性・60代)

(1)地域芸能に関わることになった経緯・変化

地域芸能に関わるきっかけについて

Q

ご自身は地域の芸能には、いつ頃から触れてきましたか？

A

小さい頃の記憶では、獅子舞を見るのが楽しみだったことを覚えています。1年に2回か3回しか見ることができないので、怖いけど見たいという変な感情でした。その頃は、旧暦の十五夜に夜中の0時から人が集まっていたので、寝過ごして観られなかった時の何とも言えない気持ちを思い出しました。私たちが青年会の頃までは、すべて旧暦で行事ごとを行っていました。

自治会について

Q

現在、自治会はどのような状況ですか？

A

自治会の会員は、150世帯です。以前よりは減っていると思います、アパートも多くなっているのですが、戸建てではない住民の方は自治会としても加入を推奨していません。地域住民の

数から考えると、加入世帯数は少ないと思います。

Q

アパートの方が加入できないのは住民の出入りがあるからですか？

A

そうですね、地域のことを決める時に出入りが多いと不便なことも多くて。長く住む住民と、あまり地域参加に積極的ではない住民との話し合いをまとめることも難しいです。あまり自治会への加入も積極的に進めてはいません。

自治会の運営について

Q

自治会運営はどのような形で取り組んでいますか？

A

会費は自治会構成員としての意識付けも大事なので、毎月会費を徴収します。運営予算は、各組織に振り分けてお渡ししています。

しかし、それぞれの組織では獅子舞などで厄払いしたりしてお気持ちを頂いて活動資金にしているということもありますので、全部がその活動費というよりは一部を支援している形です。

自治会の年間行事スケジュールについて

Q

こちらの自治会は年間行事が多いと聞きますが、年間のスケジュールを教えてください。

A

そうですね、毎月なにかがありますね。3月あしびは、婦人会だけでやる男子禁制の行事、旧暦の2月、5月、6月がうまち(拝み)、7月は綱引きの綱を準備、8月は豊年祭、綱引き、旧盆ウークイ、エイサーなど、9月、10月はカジマヤトーカチ合同祝賀会、十五夜、那覇大綱引き、1月は新年会、餅つき大会、2月はウガンブトウシ。

この地域のエイサー儀式は、独自のエイサー唄があります。19番まであって、結構長いですよ。2月のウガンブトウチは旧暦の12月24日行事です、旧暦の1月にハチウクシでウガンを結んだものを解く儀式です。1年お守りいただいてありがとうございますという感謝の儀式です。カンクウカンクウは、守り獅子。三山時代に糸数城を滅ぼしたケーシ(返し)としておかれたそうです。ケーシは滅ぼされた方の怨念を返すという呪術的なおまじないのようなものだと思います。

長者の大主(うふしゅ)という、組踊もあります。これは、村芝居のようなものなのですが、不定期でやろうってなった時に何年かに一回でやっています。物語は、十五夜を楽しむという感じの内容ですが、昔は結構盛んにやっていたようです。

旧暦だと平日開催の行事になってしまうので、仕事を休んでまでやりなさいという雰囲気でも

ありませんし、今の時代に合わせていますね。

自治会の運営について

Q

自治会総会が開かれると思いますが、役員体制などはどうなっていますか？

A

評議員会があります、10名で構成されています。自治会側で年間のスケジュールを作成して、評議と評議委員会を月に一回実施します。青年会2名、中建会2名、壮健会2名、健老会2名、婦人会2名という構成です。

公民館について

Q

(自治会で公民館を運営されていますが)公民館の方はどのような活用をされていますか？

A

自治会員の皆さんには無料で貸しています。外部の方からも貸してくださいという話はありませんが、基本的にはお断りしています。

旗頭について

Q

旗頭のチンク隊をやっていましたが、どのくらいになりますか？

A

もう20数年になります。那覇大綱挽のチンク隊の子供たちを編成してまとめる役割をやらせていただいています。多いときは、総勢60名くらいいましたかね。カレーをつくってあげたり、送り迎えしたり、忙しくしていましたね。子供たちを帰宅させるまでは安心できないですし、ちゃんと帰ったかどうか確認も含めて神経を使いましたね。今では持ち回りになっていますが、本当に大変でした。

(2)地域コミュニティの後継者に関する課題と展望

自治会事務局運営の課題と問題点

Q

自治会を運営していてよかったエピソードを教えてください。

A

行事運営は大変だったとしか言いようがないのですが、関わった子供たちが顔を覚えてくれて、あいさつを貰うとうれしいですね。何かあったら自治会においでって言っています。

Q

自治会として課題に感じることはありますか？

A

自治会としては、他地域の自治会とは旗頭などで交流があるのですが、学校とのコミュニケーションが少なくなっているのが気になります。

基本的には、独自でやらないといけない行事ばかりですので、必然的にそうなってしまいます。自治会活動が盛んだった頃は、各字対抗の運動会がありました。競い合って、楽しかったですね。

Q

後継者に関する課題はありますか？

A

とにかく、組織の人間が減っているので役職を兼務している形ですし、若い人をどんなふうにかき込んでいくかということでは悩んでいます。

実は、子供会は休止しており、学校とも連携しづらくなっています。餅つきやこいのぼりの行事には子供達もちらほらくるのですが、親が来てくれないのも課題です。

行事運営について

Q

行事を整理するという事も考えたりしますか？

A

別の地域が今取り組んでいると聞いていますが、生年祝いのカジマヤーやトーカチ、敬老会をまとめて 2 月に開催しているそうです。この地域だと、それぞれ別に開催するので 4 回ぐらいになるので、これを 1 回で終わらせられるとだいぶ変わりますよね。

とはいえそれを提案すると会員の皆様はなかなか納得してくれないこともあると思います。あと、カジマヤーなんかは、都合よく日程を変えると、元気で健在の方はいいですけど、間に合わなくなる人もいたりして、難しいですよ。

(3)地域コミュニティとのつながり

自治会と学校の連携について

Q

自治会と学校との連携についてはいかがでしょうか？

A

少し希薄ですね。

自治会では、平成 26 年から学童パトロールということで学校の下校時間帯に地域を回って

います。学校の終業時間が学校行事によって変わる時があるので、スケジュールをもらえませんかと問い合わせたのですが、小学校からは1度スケジュールを送ってもらいましたが、そのあとまた途絶えてしまって。小学校とのコミュニケーション不足ですかね。

この小学校では、小学校区まちづくり協議会も立ち上がるようですが、その説明会に参加して、学童パトロールの話をしたら驚いていましたね。

子供会が活動していたころは、旗頭を教えてくれるからってという感じで学校側は考えていたと思います。それがなくなったので、関係性も途切れていますね。

【学校関係者へのヒアリング】

令和6年2月28日

インタビュアー:西平博人/長嶺一輝/平岡あみ

インタビュイー:学校関係者(女性・50代)

(1)地域芸能との関りについて現状・変化

学校と地域芸能のかかわり方について

Q

昨年度、那覇大綱挽まつりに参加されて、率直な感想をお願いいたします。

A

生徒の参加人数が思った以上に多かったのは驚きました。練習も夜でしたが、保護者も地域の方も関わっている中で、地域活動として捉えて取り組んでくださったことに感謝しています。

当日は、私も初めて観覧させていただきました。長く那覇市に勤務していますが、14基がパレードしているのは勇壮でした。本当に歴史を感じる大切な伝統芸能だなと痛感いたしました。そこに子供たちが関わることの重要性を認識し、非常に貴重な体験だったと思っています。

後日、大綱挽の綱と写真やポスターをラミネートしたものを、全校朝会の場で、参加生徒を表彰させていただきました。私は子供たちが将来社会に出たときに、地域に貢献できる人材の育成ということを考えているので、地域行事を知って、ボランティアや行事に参加することの重要性を伝えられる大きな行事だったなと思いました。

ただ、学校との関わりについて旗頭と大綱挽きをそれぞれ整理して話したいと思います。まず、大綱挽については学校の役割として子供たちへの周知、そして表彰だと考えています。参加したことを評価する、実績として発表することが大事ななと思っています。そのため今回の大綱挽の関わり方は、学校として全く負担ではなかったです。それとは対照に、旗頭フェスタは学校側のかかわりが多く負担になっています。

旗頭フェスタもこれだけの地域が関わっているのでも学校が関われる部分を整理できると良い

と思います。学校も地域の一員として大事な行事だということは踏まえています。しかし、職員が残って対応するのは厳しいです。大綱挽のように、地域の方が指導管理を引き取ってもらい、学校の役割としては周知と激励や奨励を担う形にして役割分担すると、旗頭フェスタも良いのではないかと思います。学校によっては指導者がいない地域もあるそうですし、担当となる先生は毎回付きっきりです。学校は生徒への連絡調整という役割に持っていけると負担が軽くなり、先生たちも応援に行きやすいと思います。

今回の大綱挽のチンク隊が地域と学校の役割分担が出来ていたので、旗頭フェスタも同じような形でできると良いと思います。また、これは那覇ハーリーも同じ問題があります。

那覇ハーリーも先生たちはボランティアという形で協力いただいています。しかし、本来の職務に加えて、ハーリーの朝練をしているので、これも実は大変です。だけど地域の行事に参加させたいということは同じ気持ちなので、学校が担うこと、地域に任せることに役割分担をすることで、地域の方も借りながら仕組みづくりができればいいなとずっと考えていました。那覇市は大々的に働き方改革を進めていると思いますので、なおさら推進していかなければなりません。積極的に協力する職員が多い学校では成り立ちますが、実は成り立たない学校もたくさんあるのです。

Q

地域行事と教員の負担は密接に関わっていますね。他にも負担感を感じることはありますか？

A

以前赴任していた地域での話になりますが、地域の鯉のぼり祭りなどは職員が日曜日に定期的に出てきてPTAとの作業があって、これも負担と言われていました。

PTA 作業なども地域のコミュニティーでできないかなと思います。本来の専念すべき業務改善のための教材研究や、子供と向き合うための時間がほしいです。私の立場としては、もっと教師と子供たちの時間をつくってあげたいですね。

地域行事への参加や関心はとても大事だと思っています。開かれた学校の実現については考えていますし、それを学校の役割と地域との連携ということで、つなげていくことは大賛成です。ここを整理するにあたって、大綱挽は今回、地域の方がコーディネーターとして子供たちを指導管理してもらったので、PTAとの連携なども含めて、今後はこの形が理想的だと思いますね。

Q

地域のチンク隊をこれまで一つの自治会にお願いしていましたが、昨年是对応できないということで、生徒たちへの声掛けとして、まずは学校に相談しようと思いお願いしたところ、生徒たちがたくさん集まり、とても助かりました。何が効果的だったと思いますか？

A

現場の教員に聞いたら、参加したらクオカードもらえるというのが効果絶大だったようです。きっかけは本来そういうことではなく、将来の自分の地元に戻って貢献できるといったことが大事ですが、積み重ねが必要だとも思いますので、結果として良かったです。学校にも地域連携担当がいますので、今後はこの方と連携した方がいいと思います。

(2)地域と学校の連携に関する課題と展望

地域行事とのかかわりについて

Q

他に今はどういうボランティア活動を推進していますか？

A

校内では朝の清掃活動を始め、赤い羽根募金や、海外歳末お助け募金、社協の歳末大掃除、沖縄県赤十字の募金活動の先行実施で NHK に直接届けるなどを今年度取り入れています。地域行事への参加は地域祭り、公民館まつりといった感じです。児童館がやっている二つの祭りには出演依頼もありました。一つは部活での出演として先生が引率し、もう一つは部活ではなくクラス単位だったので、本来は休日だった先生が引率してくれました。担任の先生が快く引き受けてくれたのですが、その日午前中は PTA 作業で、この行事を引き受けると丸一日稼働することになります。代わりに別日に代休をと調整しても、その時間さえ取れない感じです。子供たちのためを考えると断れない、しかし教員のタイムマネジメントも必要、という板挟みになっています。

ボランティアは学校経営の中で打ち出していますが、基本的には引率の先生が必要です。なんとか担当を決めて、ボランティアの引率は 3 人で回しています。

Q

それは学校のルールとして、引率がいないといけないのですか？

A

募集するところから引率をつけてほしいという依頼が来ます。社協、赤十字、公民館もそうでした。直接生徒が依頼側に申し込んで、参加者生徒の名前が学校側に通知されるというシステムだと助かります。

ただボランティアに参加したことを自己申告しない生徒もいて、依頼側から参加の通知が学校にこない場合もあります。その為、自己申告させるように生徒にはボランティア参加カードというのを 1 人 1 枚持たせるようにしていますが、それでも難しいです。

地域芸能にかかわった子供たちについて

Q

チンク隊に参加した子供たちもですが、地域行事に参加して何か変化などはありましたか？

A

「頑張ったね」「カッコ良かったよ」と声掛けをするとニコニコしながら答えてくれました。実際に学級での様子は把握していませんが、日頃目立たない子たちも一生懸命やっていたので、声掛けをする良いきっかけになりました。学年主任には、参加した生徒に絶対に声をかけて、と話しています。

こういったタイミングを逃さず、具体的に褒めることが大事だと思います。ただ「頑張っていたね」だけでなく、何を頑張っていたと具体的に説明して褒めることで、生徒の自己肯定感の向上に繋がると思います。生徒の自己肯定感と自己有用感が高まる学校経営を目指しているので、チンク隊、旗頭や、部活動でも、子供の頑張りを具体的に言語化して誉めるようにしています。

Q

旗頭をきっかけに褒められて内向的な子が、人前に出られるようになったということを聞きましたが、そういう変化などはありますか？

A

あると思います。一つのことを成し遂げて、旗頭のような重いものを立った一人で持ち上げ、それを周りの声援でやることによって自信に繋がると思います。練習期間を続けられた事は達成感にもなります。

学校のスケジュールについて

Q

学校が関わっている主な地域芸能が、10月なら旗頭フェスタと大綱挽まつりと続きますが、その時期の学校はどうでしょう？

A

ちょうど旗頭の練習が始まるくらいからは学期末で、テスト、採点、評価、子供たちの振り返りなどを行います。非常に忙しいです。我が校はそもそも教員不足で、現状1人足りない状況です。今回のように地域コーディネーターが間に入ると良いと思います。地域行事があるのはありがたい事ですので。

Q

部活や習い事など、子供たちの忙しさはどうですか？

A

地域行事は居場所作りにもなっています。部活に所属していない子にとって、とてもプラスになると思います。また部活もやりつつチンク隊にも出ている生徒もいました。チンク隊の練習が終わるのは夜ですが、親のお迎えもありますし、事務局にその辺をお任せする安心感もありました。子どもたちも翌日に影響はありませんでした。

学校での地域行事について

Q

学校行事で地域芸能を披露することはありますか？

A

他の学校では聞いたことがあります。生徒は実際に見ると感じるものがあると思います。

(3)地域とのつながりについて

地域芸能と関わる課題について

Q

再確認になりますが、地域芸能との関わりにおいて課題と感じていることはありますか？

A

地域芸能の後継者技術指導の役割は学校の役割ではないと感じています。発表の場は作れるかもしれないけど、地域芸能の技術指導などに係る人的配置などは、学校の役割ではないと考えています。

Q

教員不足など、学校を取り巻く環境の中で、地域と関わる余力がないと思いますか？

A

地域連携担当がいるので、そこを上手に活用できたらいいかなと思います。また、その方は旗頭とハーリーの担当になっています。ハーリーは朝、旗頭は夜など調整が大変です。先ほども話しましたが、大綱挽でのチンク隊みたいに、ある程度お任せできるような体制があるといいかと思っています。それなら続けられるかなと思うのですが、厳しい状況です。旗頭フェスタは何か改善しないといけないと考えていて、意見をアンケートに書いても中々改善されていない状況です。

Q

旗頭フェスタの運営主体は学校ですか？

A

はい。ただ旗頭の修繕などは地域の方がやってくれます。他の学校の地域よりは協力者がたくさんいるので、そこはありがたいです。実際、今年度旗頭フェスタに出られなかった学校もあるそうです。指導者がいないと聞きました。他の学校の話ですが、旗頭フェスタは学校職員、チンク隊はPTAや地域が行う、など最初から線引きしているとの事でした。

Q

地域連携担当を置いているのは、学校でも地域との連携を大事にしたいというメッセージなのではないでしょうか？

A

地域連携担当は 学校と地域の連携のために配置されており、教育事務所で研修などもあります。

Q

那覇だったらハーリー、大綱挽のような行事は、学校単位で出ているのですか？

A

学校単位です。とても大変です。学校単位で出るのはいいのですが、指導管理などは地域で担ってもらえたらいいなと考えています。

地域とのこれからについて

Q

学校と地域との関係性はどんな形が望ましいと思いますか？

A

これから那覇市ではコミュニティスクールを推進しようとしています。どんな学校にしたいか、どのように子供を育てていくかをお互いで共有し、地域と学校が連携していく時代になっていきます。これも役割分担だと考えます。

例えば先日、学校の花壇が雑草だらけになっていて、職員の手が回らないので公民館に相談したところ、地域に職員を貸し出して整備をすることになりました。今ゆっくりですが進めています。こういうことも地域コミュニティとの連携なのかなと感じました。行事も同じように、今後お互いの役割を活かし、お互い負担にならないスタイルが大事なのではと考えています。

例えば他市では、「こんな人を探しています」と地域のコーディネーターに相談すると、すぐに繋げてくれました。PTA 作業も自治会を繋いでいただき、沢山の参加がありました。

市教委は優先順位がありますし、予算も限られていますので、我々の相談に中々対応が難しい時もあります。そんな中、地域コーディネーターは大きな存在でした。そういう人が那覇もほしいです。地域の力は絶対に必要です。

多様化、複雑化した家庭環境にいて、配慮が必要な子が増えています。だから先生は子供たちに関わる時間を増やしたいと強く望んでいます。地域の力を借りながら、先生方にそういった時間が増え、子供たちに地域芸能を体験し、経験させていくのが、理想の形です。

Q

地域も学校も一緒に作り上げるのが理想ですね。

A

学校に丸投げされるのが一番苦しいです。一緒に考えて動ける人がいてくれるかたちが有難いです。忙しいのは当たり前、でもやっぱり目の前の子供たちに一番いい環境を作るのが私たちの使命かなと思っています。働き方改革が先行していますが、これはやるべき仕事であって働き方改革と関係ないというのもあります。その辺を精査するのは学校でやるのですが、本当は行政も一緒に積極的に動いてほしいところです。

Q

最後に何か伝えたいことはありますか？

A

いろいろなことについて、直前での依頼が多いです。これも大変になるので、前もってお願いしてほしいです。

【那覇市 B 地域】

【次世代継承者へのヒアリング】

令和 6 年 3 月 5 日

インタビュアー:西平博人

インタビュイー:継承者(女性・20 代)

(1)地域芸能に携わることになった経緯・変化

旗頭に関わることになったきっかけについて

Q

旗頭を始めたきっかけを教えてください。

A

父の影響です。父親が夜な夜などどこかに行くので、幼稚園に入る前ぐらいに「どこに行くの？」と聞いていたみたいです。

最初は仕事という感じでごまかされていたんですが、そのうちに母親と一緒に公民館での旗頭の練習を眺めに行きました。夜の外出がワクワクして楽しいということもあって。

そうやって過ごしているうちに、当時の高校生や 20 代前後ぐらいの先輩が、子供の私の面倒を見てくれて、それも楽しかったんです。旗頭には、父親もいたのでそんな感じで違和感なく中に入っていました。

幼稚園にも旗頭があり、小学校に入ると旗頭フェスタにも参加していました。当時は旗頭が盛り上がっていました。先輩が旗頭フェスタとかクラブ活動で旗頭をやっていて、文化祭に向けてがんばっていました。小学校には旗頭クラブもあり、学校の授業の一環でクラブ活動として参加していたと思います。

中学校では、部活とは別に旗頭同好会がありました。この活動の中で、中学二年の時に父親もいたので青年会に入ることになります。でも、関わりでいうと小学校四年ぐらいから集まりに参加してたし、6年生ぐらいの時には太鼓隊やボラ吹きをやらせてもらっていました。

Q

幼い頃から興味をもって続けているのはなぜですか？

A

いちばん覚えているのは、褒められるんです。お兄さんやお父さんぐらいの大人の人たちがチヤホヤしてくれました。小さいときのその褒められる印象が強に残っています。これが、高校生あたりからスタートしているのとは、また違う印象だったかもしれないです。

Q

長く続けてきて、やめようと思ったことはありませんか？

A

強いて言うならば、この地域では女子が旗頭を持ってないんです。小さい女の子がマスコットキャラ的な感じでちょろちょろするのは全然問題ないけど、青年会の年齢になった時に、やっぱり女性だからということが壁になりました。正直、来ないでいいと言われれば、もうそこで終わってしまうので、腐らずに続けました。「続けていれば絶対どこかで変わる」と、小さい頃から一緒にいた地元のお兄ちゃんたちが声かけてくれたことは忘れられないです。私以前にも女性の先輩がいたので、同じ気持ちを共有できていたのも良かったかもしれません。

同世代の関心について

Q

地域芸能に関わっている同世代はどれくらいいましたか？

A

中学生の時は、太鼓隊が必要なので同級生を誘ったりしていたのですが、高校へ進学すると、そういう活動をしない人がほとんどだったので、私の世代の女性はもういないと思います。男性を含めると同世代が10名程度はいましたが、本番だけでなくしっかりと続けて参加している人は3、4人です。

参加しなくなる理由は、高校まで行ってはやらないということ、高校まではやっても卒業して内地に行くとか、内地に行って帰ってこないとか。でも、帰省した時に参加する人はいます。

スケジュールについて

Q

所属している青年会の、年間のスケジュールを教えてください。

A

全員での練習が始まるのが、9月の初旬です。そこから10月の那覇まつり、11月の祭り。1月下旬から2月のハチウクシに向けて練習が始まるという感じです。旧正月、2月のハチウクシは旗頭の道ジュネーで通りを盛り上げます。8月は、旗頭はないですが、自治会の夏祭りで青年会として地域活動をしています。地域芸能ができるのも自治会あってのことなので、自治会ごと盛り上げるのは大前提です。

Q

日ごろの練習について教えてください。

A

今は働き方改革と言われていることもあり、日曜日はお休みですが、9月から11月まではほぼ

毎日です。あと、練習時間については22時に稽古場が機械警備に切り替わってしまうので、21時半までには練習を切り上げて、片づけて帰るようにしています。以前に比べると、だいぶ早く帰るようになりましたね

(2)地域芸能の継承に関する課題と展望

地域芸能に関わる姿勢について

Q

地域芸能の継承のために工夫していることはありますか？

A

最近 SNS 活動をしています。やはり、私より若い子たちにはもっと興味を持ってもらいたいです。

SNS では、旗頭の練習内容、補修、本番の様子を投稿しています。これからは積極的に発信し、旗頭を知ってもらい沢山の人の興味を持って欲しいです。

直接コメントがくるわけではいいのですが、会ったときに SNS 見てるよとか、動画勉強になるねっていう声があったりするので、最近はその取り組みも成果が出てきているかなっていう気がしています。Facebook、Instagram、X、YouTube を活用しています。

Q

他にも同じように SNS 使って発信している地域団体はありますか？

A

那覇の自治会では増えていると思います。

SNS を活用する事で、他の地域竿の巻き方とか、作り方で動きがわかるとか、どんな材料を使っているとか、お互いで共有することになっているかもしれません。

私も20代後半で、次世代に受け渡す側に近くなっていると感じています。良いところだけではなく、色々なこともあるけど、それ以上に楽しいということを広めて次に残すまでが使命かなと考えています。

30代や40代になり、距離ができてしまう前の今が次の世代との緩衝材になる、近い距離で話ができるギリギリの年齢かなと思っています。

Q

次世代を担う後輩も育っていますか？

A

中学校に OB として教えに行くと、そこから来てくれた子もいます。現役メンバーの子供ですが、旗頭大好きっ子もいっぱいいます。その子たちに太鼓を持たせて役割を与え、「皆が必要だよ」というメッセージを伝え、上手くできたらたくさん褒めてあげています。

実際に「皆が鳴らす音が、旗頭を持つ人たちに力を与えるんだよ、大事なものだよ」っていうことを動画で見せて教えたり、そうしながらのめり込んでもらうといいなと思っています。私が住む地域の子供会はとても活発なので、今後その子供たちが青年会に入りたいという風に思ってくれるといいなと思います。私たちの地域だけではなく、その他の地域にもどんどん子供たちの参加が広がっていけば、本当にうれしいですね。

Q子どもたちに指導するときの工夫を教えてください。

A 練習しないでできない子は、練習しなさいって厳しく言うしかないですが、練習もして一生懸命やっているけどできないというのであれば教え方が悪いと思っているので、一緒にできる方法を考えてあげるとか、動画を撮影してあげて、動画を見ながらお互いの意見を交換するという心掛けています。旗頭は、持ち手さえ工夫すればできないことはないので、自分なりの答えを一緒に考えています。

Q

地域芸能の継承について、展望を教えてください。

A

正しい歴史を知った上で、次の世代がもっと学びたい、携わりたいと感じてくれると良いと思います。そうなるように旗頭を文化としてしっかりと伝えていきたいです。以前は、別の地域との難しい関係などを伝え聞いてましたが、私たちの世代だけでなく、色々な世代で交流も増えていますし、他の地域の旗頭文化と交流することも楽しみです。

那覇市は旗頭のまち宣言をしました。沖縄にはエイサーもあるけど、旗頭の存在感もしっかり伝えていきたいです。

(3)地域コミュニティとのつながり

青年会について

Q

現在の青年会はどのくらいの人数が所属していますか？

A

リストで見れば、多分30名~40名くらいはいます。

しかし、皆が参加するかというとそうではなく、実際には20名~30名くらいだと思います。練習となるともっと少なく、10名いたらいい方で、平均すると6名くらいです。

演舞の時に人が足りなくなった場合、隣接の自治会から支援してもらったりしています。

青年会には卒業がありません。「生涯青年会」って呼んでいて、上は70歳もいます。

地域文化と芸能への誇りについて

Q

地域活動や芸能を誇りに感じることはありますか？

A

YouTube に公開した動画に「〇〇の旗頭はやっぱり違う」とか「〇〇が入ってきたら会場が凄く盛り上がっていた」などのコメントを見ると、自分が住む地域の持つ伝統と歴史は誇らしいなと思います。もちろん、他の地域に住んでいる方の中にも、同じような気持ちがあると思いますし、名前をあげてもらえることは素晴らしいですね。

Q

地域芸能や地域行事などの活動は、地域住民にどのように受け取られていると感じますか？

A

旗頭は夜練習するとうるさいんです。ボラやチンク隊も鳴らしますし。だいが昔なら、地域の人たちには季節の風物詩かなっていう感覚だと思いますが、新しい住民にとっては騒音に聞こえる場合もあるんです。少し時間が遅くなってくると、抑えめにしたり、休憩を入れたりするんですけど、「あんたたち元気ないよ、今日は！」って励ましてくれるおばあちゃんもいるんです。演舞には、杖をついて支えられながら見に来てくれたり、沿道で声援を送る地域の人たちの顔を見ると、受け入れられているなと感じます。それから、自治会や地域の人たちが周りの住民に「稽古の音はこの時期だけなので」とか「時間は守るので」というような声掛けをしてフォローしてくださっていることも、そしてそれを受け入れていただいている地域住民の皆様にも、感謝しています。敬意をもって丁寧に対応しなければと肝に銘じています。

地域芸能や自治会活動における課題について

Q

地域芸能や自治会行事に関わる中で、課題に感じていることはありますか？

A

先輩方はお酒をたしなむ方が多いんです。昔は若かったでしょうし、酒豪話もよく聞きますが、古いモラルが通用しないこともあるので、ある程度のところでおさめて、ゆっくり家で飲み直すとか考えていただきたいです。青年会が怖いところという印象を与えると、次の世代が入りにくくなります。

本番中の飲酒は、力水と言って泡盛が必要な場合があるのは私も知っていますが、度が過ぎるとただの飲酒ですし、印象も悪いです。集中力を高める程度の量にとどめないと、態度にも出るので、あまり好ましくありません。

他に青年会としては、練習を早めに切り上げたり、自宅まで送ってあげるなど、若い子たちが感じている不便さに柔軟な対応をしています。内側でやれることもそうですが、外から見られ

たとき襟を正している姿も、若い子が参加するリスクを下げることにつながるので、しっかりと先輩方にも伝えていかないといけないと思っています。

もちろん、改善されている部分も確実にあります。

那覇まつりでは路上完全禁煙ですが、先輩方の意識も変わり、裏通りにいって喫煙所を探したり、横柄な態度をとる方も少なくなっています。とある地域の旗頭では、演舞中はお酒を1滴も飲まず、村屋に帰ってきて、みなでお酒を飲み始めるというところもあって、その文化はとてもいいと思います。でも、本当に力水程度に抑えれば、カッコいいんだよってということも文化として知ってもらいたいですし、今後の課題かなと思います。

Q

組織の運営面で気を付けていることはありますか？

A

やっぱり、緩急は大事です。先輩の相手をしたり、酒席でお世話したり、体育会系で窮屈な部分がありますので、なるべく同世代の子たちは先輩のいないところで目線を合わせてコミュニケーションを取ったりしています。息抜きも含めて、「今日は、グラスの減り具合みないでいいよ」っていう日を設けたりしています。

先輩方の相手をするのはしんどいと思います。ただ、その子たちも大きくなって酒席の場に出たときに、コミュニケーションの学びとして無駄なことではなかったと気づくと思います。小さな子供たちには、全体行動ではルールを守ることの必要性を教えたり、終わった後はよくできたと褒めたりします。みんなの前で挨拶をさせて、大人たちから拍手をもらったり、ご褒美に一人一人お菓子をあげたりすることで、成功体験とまではいわないですが、大人たちに承認されているという喜びを体感してもらうことも重要だと思っています。

自分の小さいころの体験が、とても生きています。出来たことを褒めてもらえるのはやっぱり大人や子供に関わらず嬉しいと思います。先輩方も、「あのときのフォローとても助かりました、カッコよかったです」という話をする、とてもいい笑顔を返してもらえますし、会話も弾みます。

【次世代継承者の保護者へのヒアリング】

令和6年3月5日

インタビュアー：西平博人

インタビュイー：保護者(女性・40代)

(1)地域芸能に携わることになった経緯・変化

旗頭に関わることになったきっかけについて

Q

お子さんが旗頭にかかわるようになったきっかけは何ですか？

A

最初は私と二人で旗頭を見ていました。青年会の方が鐘を鳴らしていて、手が痛いから代わるよう促されて叩いていたのを私も疲れたので、小さい彼女に手渡したのが最初です。

そうしたら、先輩たちが打ち方が違うとか、音が違うとか、いろいろ教えるので面白くなったんですかね。リズムを取っている感じとかが好きだったようです。興味がわいたのか、楽譜に起こしていたのは驚きました。

Q

中学生になって青年会に入ったとのことですが、その時はどのように感じましたか？

A

自然の流れだと思いました。特に違和感はなかったです。

私の教育方針も普通とはちがうのかもしれないですが、青年会活動とか大人との付き合い方は教科書に載ってないじゃないですか。全部教えてくれるから、社会に揉まれて来なさいみたいな感じでした。どこまでやったら怒られるか、線引きはどこか、自分の加減も分かってくる。だいたい生まれたときから反抗期で、親の言うことを聞かないので、周りが言うと言わないかと思いました。基本のあいさつ、ごめんなさいとありがとうは言えるようになりなさいということ以外は、青年会が教えてくれるなっていう想いでした。また、父親と一緒に地域の集まりに行くので、歩いているだけで声掛けをしてもらって、地域に育てられた子供です。

やはり、文字では教えてもらえないというか、社会や国語、道徳でも教えてくれない、生きている教科書から学んだほうが良いという考えでした。地域の目もありますから、変なことをすると、すぐに漏れ伝わってきますので、親に隠し事もできないだろうと思いました。

Q

お子さんだけでなく、ご自身も地域芸能には関わってきましたか？

A

そういうわけではないですが、幼少のころ獅子舞が来たとき、やっぱり追い回していましたね。興味が生まれてついていくのはこの子と一緒にです。獅子舞は怖かったですけど、お兄ちゃんの演舞がかっこよくて、どこまで行くんだろうという好奇心でついて行ったんです。

Q

旗頭を始めて、お子さんに変化はありましたか？

A

女性は打たせてもらえないとか、参加させてもらえないというときに、一度悔しくて泣いてい

たときもあったんです。だけど、そういうことを乗り越えて、周りが認めてくれて、旗頭に参加するときに刺繍されている袴をつくってくれた時はとても嬉しそうでした。後輩の女の子たちが中学を卒業した後に、旗頭を続けたいという相談が私にあたりしたのですが、彼女にそのことを伝えると、結構厳し目に、生半可な気持ちで来ないでほしいというようなことを言うんです。やっぱり自分が一番理不尽な想いを経験しながら今があるので、「だから女はだめなんだ」と言われるのが許せないらしくて、この覚悟の部分は芯がブレないですね。たぶん、そういう経験を経て、好きが増したんでしょうね、教えるなら半端には教えたくないという心意気ですよ。

(2)地域コミュニティとのつながり

地域活動や自治会などのかかわりについて

Q

地域活動に関わるきっかけは何でしたか？

A

嫁いだ先が夫の親と同居家族だったので、すでに自治会には入っていました。

自治会の行事やお祝い事には、祝儀などを届けたりはしていたので自然の流れというか、どの時点から地域芸能に関わったとか、地域芸能に関わったから地域コミュニティに入ったとか、そんな境界線のようなものがなかったので、自分でもきっかけはよく覚えていません。

Q

自治会活動に関わる中で大変なことはありましたか？

A

私自身は自治会活動に深く関わっているわけではないし、お祭りが好きなのでお願いされたら断る理由もないのでお手伝いしているという感じです。

婦人会のような集まりには、よく誘われていますが、私としては夫と娘のいる青年会のお手伝いをするほうが自然かなと思うのでそうしています。とはいえ、無関心というわけではなく、適度なお手伝いしながら良い関係性を築いています。

Q

自治会内には、年代ごとにサークルがありますか？

A

そうですね、いろいろありますね。

頭に浮かぶだけで、8つか9つぐらいの集まりがありますね。ダンスサークルとか、民謡や囲碁、デイサービスで公民館を使ったりしています。

【地域芸能演者へのヒアリング】

令和 6 年 2 月 27 日

インタビュアー:西平博人

インタビュイー:演者(男性・60代)

(1)地域芸能に携わることになった経緯・変化

旗頭を始めたきっかけについて

Q

旗頭に関わったきっかけを教えてください。

A

二つ上の兄が青年会を復活させて、D(地域名)に旗頭がなかったのでスタートさせたのが関わったきっかけですね。地域の廃品回収をやって少しずつお金を集めながら予算を組んだりして、旗頭を制作しました。年齢で言うと、24 歳か 25 歳くらいの時だったと思います。

Q

当時の自治会と青年会との関係性を教えてください。

A

私が幼少のころは青年会が余興をしていたことを覚えています。それから5~6年ほどは途絶えていたのを、自治会のイベントに協力することから、ふたたび青年会が始まったという感じ。私の兄が旗頭を作りたくて、青年会をつくったといっても過言ではないと思います。そのころからしばらくは、青年会も活発で、イベントや自治会行事としての盆踊りとか、敬老会や子供会などの行事もいろいろありました。しかし、ここ10年ほどはご存じの通り少子化といわれて、子供会も活動していません。青年会は、青年会長と副会長と2名ぐらいで活動していますし、行事ごとでは交流している那覇の壺屋や泉崎、遠くは糸満新屋敷などのお力も借りながら、20~25名ぐらいが集まって旗頭の演舞をしているという状況です。集まれば、みんな「D(地域名)んちゅどー」という風に言ってくれます。青年会もそうですが、自治会も継承者がいないんですね。

青年会の活動について

Q

青年会は、旗頭以外の活動もありますか？

A

旗頭の期間は、だいたい那覇大綱挽ごろから練習します。それから年が明けると活動休止になります。オフシーズンも何か盛り上げようということで、2代目の青年会長がエイサーを起ち上げました。旧盆にはエイサー道じゅねーもしたり結婚式やイベントで声がかかれば10数名で演舞したりということも頻繁にやっていました。今は青年会も人がいない状況なのでやっていませんが。

Q

村旗(地域の旗頭)は、どこで掲げますか？

A

村旗はだいたい公民館や沿道に出て地域の十字路を回ります。道路を通行止めにして上げていますね。地域によって正月ごろには「旗すがし」という行事があります。町内の拝所を何カ所か回って、要所あるいは交差点などで演舞します。青年会の予算作りも含めて、ご祝儀をいただいたりしていました。

(2)地域コミュニティとのつながり

地域の方々との関係性について

Q

青年会のエイサーや旗頭の練習などはどこで、何時ごろにしていますか？周辺の地域住民との関係性はいかがですか？

A

公民館を使って練習していました、広場もありますし。

クレームのようなことはないですが、演舞するのであればひと声かけてというようなお叱りを受けたことはあります。それは私たちの配慮が足りなかったもので、気を付けるようにしています。

練習時間は、24時まではいいいよねという暗黙の了解がありましたが、最近は23時を過ぎたら公民館の中に入るようにしています。

地域行事について

Q

地域行事はどのようなものがありますか？

A

慰霊祭があります。6月23日が慰霊の日なので合わせて行っています。そこでの地域芸能の演舞などはありません。厳かに執り行う感じです、そのまま自治会総会などを開いています。

Q

青年会の活動に対して、地域の方に理解はされていますか？

A

それはもう、しっかり理解してもらっていると思います。エイサーや旗頭、地域に根差した青年会活動をずっとやってきているので、皆さん協力的ですし、多少のご祝儀を持ってきたり、そういうことは変わらずやってくれています。

青年会 OB や若い二人の青年会は慰霊祭の前の清掃とか年末の清掃、地域や公民館の清掃などを率先してやらせていただいています。しかし、年々人は減って行ってますね。

Q

自治会活動にはどのように住民の方々を集めていますか？

A

毎月の定例会があり、そこで連絡共有しています。ご高齢の方や周辺の方々には文書で案内しています。

Q

ご自身の旗頭を続けているモチベーションはどこにありますかはどこから？

A

観衆の前で、下から一発目を上げるという満足感と、達成感。

それから、「差す」という持ち方があって、腹に乗せるのではなく差す状態を維持しながら持ち手を変え、ローテーションするときの「美ら旗」といわれる時の旗を躍らせる感じは気持ちがいいですね。観衆から上手だったねって言われたら、ものすごく嬉しいです。

(3)地域芸能の継承に関する課題と展望

地域芸能が抱える課題について

Q

現在の課題を教えてください。

A

後継者育成ですね、少子化に伴って、本当にいないですね。

毎年1月に新春の宴で、旗頭演舞があるのですが、今年はできませんでした、9名しか集まらなくて。20名はいないと演舞の形にならないので、残念ながら旗頭の演舞はありませんでした。コロナで空白もあり、行事ごとの中止が相次ぐとなかなか人も集まらないですよ。

Q

学校と連携している取組みはありますか？

A

旗頭に関してはないです。これからですかね、小学校には立派な旗頭があるので。校区まちづくり協議会が立ち上がってるので、その辺が中心になってくるんですかね。地域の方々と学校とまちづくり協議会がイベントをやるそうです。ダンスをやったり三線をやったりなので、旗頭に関してはこれからかなって期待しています。

Q

そもそも地域に若者が少ないですか？

A

少ないですね、目に見えて少ないです。

青年会活動もそうですが、旗頭で鐘の音が聞こえれば覗きに来るような子供たちが増えて、興味を示してくれたらいいんですけどね。今は、子供会としても活動がないので難しいですね。

行政の支援について

Q

行政の支援について、課題や要望はありますか？

A

那覇市の観光課とお話する機会があって、具体的な取り組みを相談している状況です。旗頭やエイサー関連の制作にかかわることや、衣装の新調、太鼓などの道具の修繕などに取り組みたいところですが、収支のやり取りが非常に複雑で難しいところがあります。それをどうにか簡素化してほしいというお話はしました。単年度で精算をするというのは使いにくいです。毎年修繕があるわけではないし、積立とかで必要なときに使えるようにするといいですよ。しかも飲食に係る費用などは該当しないので、行事をするにも演者や裏方に何か用意したいということもかなわない。

だから、保存会などとは別に、新しい事務局組織をつくって仕組みづくりをしたらいいんじゃないかと思います。那覇市は旗頭のまち宣言をしました。那覇市長も古謝副市長もどんどん前に進めてほしいと言って、もう 3 月ですよ。那覇市としても推進の立場で、どんどん提案してという感じなのですが、進め方がわからないですよ、少し不透明な部分もあって。

Q

旗頭を演舞する場が、より多く必要だと思いませんか？

A

国際通りで定期的に演舞できる機会があればいいと思います。

昔の那覇大綱挽では、国際通りの演舞は、もっとゆったり、タイムスケジュールもなくやっていたので、そういうのもいいですね。演者の発表の場が増えるのもいいですね。

旗頭を通して次世代に伝えたいもの

Q

旗頭を通して、子供達や次世代に伝えていきたいものはありますか？

A

沖縄の素晴らしい旗頭文化の継承と発展、それをつなげることは健全育成にもつながると思います。子供達が学校でやっている旗頭フェスタもとてもいい取り組みですよ。そのイベントを手伝えるところはサポートしたいです。働き方改革で教員も大変だと思いますし、地域で担っていくことは大事ですよ。

自分が生まれ育った地域にそれがあるのであれば、旗頭を持ちたいという気持ちが根付けば、ひいては青年会活動につながり、地域活性化につながっていきますよね。将来的に、ではなく、今やりたいですね。

旗頭、エイサーを演舞するということは、そこに観衆がいらっやいますからね。あの頃は楽しかったということではなく、またあの盛況を子供たちを中心に経験させたいなっていうのはありますよね。

近隣自治会や学校との連携について

Q

隣の自治会と連携した活動はありますか？

A

青年会も自治会もこれまでの方々が高齢になって、なかなかそういう話にはなっていないですね。昔は櫓を組んで盆踊りとかもやっていましたが、今はそういうのもなくなって、隣の自治会がやっているのでも、声掛けもあったのですが、連携してという動きにはなっていないですね。

Q

旗頭の活動について、近隣の高校との連携はいかがですか？

A

高校生は元気のいい子たちが興味持ってくればね、とてもありがたいですけど。高校に働きかけはまだやってないですね。やるべきかなと思いますね。大人の旗頭を実際にもてるのは高校生ですから。

【地域コミュニティへのヒアリング】

令和6年3月5日

インタビュアー：西平博人／平岡あみ

インタビュー：地域コミュニティ関係者(男性・50代)

(1)地域芸能に関わることになった経緯・変化

小学校区まちづくり協議会に関わることになったきっかけについて

Q

小学校区まちづくり協議会の会長になった経緯を教えてください。

A

元々は小学校の PTA 会長として、小学校区でまちづくり協議会が立ち上がる時も準備委員会や事務局などを担ってきました。

この地域の小学校区まちづくり協議会には9つの自治会が参画しています。この地区はとても自治会活動が盛んな地域です。最初は自治会の中からまちづくり協議会の会長を選出することになり、自治会長が集まる協議会の会長をされていた方が会長となりましたが、任期満了に伴い事務局をしていた私に交代しました。

Q

自治会など他団体との連携はありますか？

A

まちづくり協議会として単独行事として企画しようとしても、各自治会や他団体の行事日程と重なり、PTA まで含めると単独開催を行う難しさがあります。

そのため、他団体の事業と一緒に連携してやる事が多くなっています。具体的に言うと、小学校が通りを清掃する、自治会が花の苗植えをするという情報があった時、まちづくり協議会として声を掛け、共同で実施するというパターンが多いです。とはいえ、これまでコロナ禍の影響で活動をほとんど休止していたので、まだ手探りで何ができるか模索中という感じです。

小学校区まちづくり協議会の運営について

Q

どのように運営されていますか？

A

意思決定機関としては、月に一回定例会があります。他にも3つの部会があって、それぞれで話し合ったことを定例会で報告、相談する形で進めています。自治会のような会員という形ではなく、参加者は基本的に行事への呼びかけで集まった人たちで運営しているので、特に名簿などありません。毎月の定例会には、会長、副会長を含め、10名くらいが集まります。

Q

小学校と連携して実施する事業は多いのでしょうか？

A

これまでの連携した事業としては草刈りや木の伐採などの環境整備が多かったです。

コロナ禍で環境整備活動に学校としての参加が難しいとのことから、まちづくり協議会へ相談がありました。PTA で呼びかけると人が集まりすぎてしまうのでコロナ禍では難しい、適度な人数でコントロールするため、まちづくり協議会でお願いしたいとの理由でした。そういう相談なら問題ないということで、私たちが作業しました。

他に学校関係でいうと、横断歩道の旗振り活動でスクールゾーン委員会と連携しています。夏休み明け、色々な理由から登校できない子供が多いと伺い、子供たちの雰囲気明るくする為、仮装して旗振りを行った事もあります。

旗頭では小学校としっかり連携しています。年に一回の旗頭フェスタに出場するため、子供たちは練習を積まなければいけません。連携内容は子供たちを指導する青年会との繋ぎ役です。まちづくり協議会に参画している自治会のうち、全てではないですが多くの自治会の青年会に指導者の派遣を依頼し、集まった数人の指導者で子供たちを教えています。

旗頭指導者の LINE グループには現在 22 名ほどいますが、スケジュール調整なども行なっています。この地域は子供たちも旗頭に触れる機会が多く、季節のまつりが年 4 回、他にも 13 祝い、小学校の祭り、創立記念日などがあります。

練習はイベントの2, 3週間前ぐらいから取り組み、週 1 回か 2 回ぐらい、旗頭フェスタの前だと、より練習回数が多くなります。毎月練習しているという感じではありませんが、年の半分ぐらい、旗頭のシーズンがある感じです。

小学校と関わることで、子供たちが中学校や高校へと上がった時に、旗頭を思い出してもらって、自分達の街で担い手として育ってくれるといいなという想いです。今は青年会も人が少なくなってきましたので。

Q

小学校側には担当者はいらっしゃいますか？

A

昔はいました。しかし、働き方改革の流れもあり、学校窓口として対応してもらってはいますが以前のように指導する感じではないです。前は地域担当という先生がいたような気がします。

Q

イベントなどの引率はまちづくり協議会のみなさんが預かる形ですか？

A

そうです。ですが、まちづくり協議会としての立ち位置で動いているのか、分からなくなる時があります。地域団体、協議会の所属が重複している人が多く、どこが主体になって預かっているのかわからなくなる時があります。

例えば、私はまちづくり協議会の会長ですが、地域の振興会にも在籍していますし、他に他の自治会、OB会などにも入っています。色々な行事に声を掛けられ、色々なところからボランティアも依頼されますが、集ってみたらよく顔を合わせる人たちが集まっている感じです。10

団体で 10 人ずつ声掛けした場合、本当なら 100 名集まりますが、実際には 10 名~20 名くらいしか集まってないという状況もあります。つまり、他の皆さんも地域団体に重複して在籍しているという事です。地域に人材が減っている、難しい課題です。

Q

旗頭フェスタの子供たちへの指導はまちづくり協議会が主体的に対応していますか？

A

経緯として、最初はまちづくり協議会でという形ではなく、私の前任者がボランティアで行っていた事を引き継ぐ形で取り組みました。取り組み始めると、これは 1 人では大変だと思い、知人を誘いながら続けました。今は先ほど述べたように、各自治会の青年会と連携して、まちづくり協議会として対応しています。

まちづくり協議会の役割

Q

まちづくり協議会と自治会の違いなどを教えてください。

A

自治会だと退職された方が中心になっていることが多く、子育て世代の方は自治会との日程調整が難しく、行事の準備などに参加しづらいことが多いです。子育て世代は平日の昼夜共に忙しい。そのため自治会イベントなどは準備期間に参加できず、先輩方に頼ってしまいがちです。

まちづくり協議会は参加者に子育て世代が多く、企業の方もいらっしゃるので相互協力がしやすいと感じます。自治会には入らないけど地域活動はしたい、という方も一定数いますので、その人たちの受け皿としてもまちづくり協議会はある程度機能していると思います。

Q

イベントの周知や参加確認などはどのような形で進めていますか？

A

周知や参加確認などはLINE公式アカウントで行なっています。HPでも告知をしています。

Q

自治会に入りづらいことの要因として思うことはありますか？

A

よく言われるのは、入るメリットが無い、と言われることが多いです。

確かに具体的で物理的なメリットは感じにくいですが、ご近所同士が会話しやすくなる、など見えづらいですが、大きなメリットはあると思います。地域全体で交流し、同じ体験を共有する事で、コミュニケーションがしやすくなる、そういった、数字では表せない、目に見えない、大切

なものが得られるメリットを伝えますが、なかなか難しいです。

Q

まちづくり協議会の予算はどのように捻出されていますか？

A

那覇市から予算が下りています。ただ、あまり使っておらず、使えなかった分は、那覇市に返しています。人件費で使える分は使っています。

(2)地域コミュニティとのつながり

まちづくり協議会と学校との連携

Q

小学校との関係性で感じている事を教えてください。

A

本当はもっと学校と交流したほうがいいと思っていますが、学校も働き方改革があつて、どこまでお願いできるのかなど距離感が難しいと感じています。

Q

子供たちに旗頭を教える上で、工夫をされていますか？

A

子供たちが旗頭を持った時、四隅美縄(ユシミナー)を使いながら指導者でコントロールしたりしています。

倒れそうになったらこちらで四隅美縄(ユシミナー)を引いて倒れないようにすることで子供たちの自信を深め、のめり込ませる工夫をしています。

練習への毎回の参加は強制していません、子供たちが継続して来ることができる空気作りに努めています。練習については事前に指導者全体で共有し、指導の際の気をつけるポイントにしています。

(3)地域コミュニティの後継者に関する課題と展望

地域芸能の課題について

Q

地域コミュニティという視点から、地域芸能の課題は何だと思えますか？

A

圧倒的に人数不足です。旗頭も青年会もどこの町も減っています。

Q

ご自身が長く青年会関わられて、いつごろから減った印象ですか？

A

目に見えて減っているという感じではありませんが、継続して少しずつ減っている気がします。昔は青年会に行くとお酒が飲めるとか食事ができるとか、先輩が飲み連れて行ってくれるとか、そういうことで人が集まっていたと思います。今はそれがメリットになりづらい時代です。それから、旗頭を目にする機会が圧倒的に少ないです。エイサーで例えると、エイサーは色々な所で演舞する機会が多い、必然的に多くの人々がエイサーに接する場面が増えますので、当然興味を持つ人も多くなります。旗頭はそれが無く、エイサーのように興味を持つ人が増えてきません。当然旗頭を主とする青年会にも興味を持つ人は増えず、青年会は先細っていきます。そうなるとう青年会の人数は減少し、人数不足から演舞ができなくなり…といった負のスパイラルが起きているように感じています。

他にも、中高生の不在を感じます。小学校までは旗頭フェスタや地域清掃に参加など、喜んで地域に関わってくれる子は多い気がしますが、中学校、高校になるとグッと少なくなる印象があります。中学、高校で思春期になると興味関心も多様化しますので、難しいです。

Q

これからのまちづくり協議会として行いたいことはありますか？

A

地域の旗頭を中心に、旗頭をするだけでなくそれ以外の子は勉強をするなど、子供たちが勉強などを教え合うような交流の場を作りたいと考えています。自習室ではないですが、放課後に集う拠点づくりをしていきたいです。

例えば、高校生が中学生の勉強を教え、中学生が小学生の勉強を教えるなど、そして成長したら今度は自分が下に教える立場になるような、そんな子供たちの縦の繋がりが生まれるような場所になると素敵だと思います。

そして旗頭だけをやれば良いということではなく、成長したら子供たちのそれぞれの地域で、草刈り活動、学事奨励、敬老会などにも関わってくれる様になっていくような、そんな成長の場を作っていきたいです。

小学生、中学生、高校生、それぞれが地域の行事で交流しながら、学び、成長したらそれを自分たちで担っていく、そんな状況が地域で作れると素敵だと思います。

【学校関係者へのヒアリング】

令和6年3月15日

インタビュアー:西平博人/長嶺一輝/平岡あみ

インタビュー:学校関係者(男性・50代)

(1)地域芸能との関りについて現状・変化

学校と地域芸能のかかわり方について

Q

小学校の地域芸能との関わりについて教えてください。

A

旗頭については、地域の方に面倒を見ていただいています。学校の公式なクラブ活動というわけではなく、保護者ボランティアの方が中心となって、子供たちに旗頭を指導して、地域にあるお祭りや旗頭フェスタなどに参加しています。地域の方が子供たちを引率してお祭りに参加しているという形です。

Q

旗頭の練習はイベントに合わせて実施していますか？

A

そうですね。通常、旗頭は学校の倉庫に保管されていますが、催事が近くなると体育館の舞台の方に置いて、練習日には5、6年生が持ち出して運動場で練習しています。

地域の祭りが多い学校区なので、他の学校より旗頭を発表する回数が多いと思います。

参加する子供たちの人数は、だいたい15人~16人ぐらいだと思います。

Q

旗頭の活動には担当の先生がいらっしゃいますか？

A

クラブ活動ではなく、地域活動に子供たちが参加している感じなので、現在は職員が関わっていない状態です。本来であれば、学校の旗頭なので関わらないといけないと思っています。

地域連携担当の先生が祭りや旗頭フェスタにはついて行って、子供たちの管理をしますが、直接指導はしていません。指導や運営は、地域ボランティアの方にお任せしている形です。

Q

子供たちはどのように募集していますか？

A

集めるのも地域の方にお任せしています。地域ボランティアの方が子供たちに声掛けして、集めているのかもしれないです。募集活動を見た記憶も、依頼されたようなことも聞いていません。

Q

那覇大綱挽まつりとの関わりはありますか？

A

チンク隊がローテーションで各小学校に回って来ます。

Q

子供たちは学校のクラブ活動と旗頭を兼務していますか？

A

部活と日程に被りがなければ、兼務していると思います。

確か、バスケット部に所属している子が参加していました。

参加した子供たちの変化について

Q

子供たちの様子は、旗頭の参加によって変化がありますか？

A

そうですね、運動会で上げている時は声も出ていて、熱く取り組んでいる感じでした。

それを見て、他の子どもたちが自分もやりたいとなる機会をつくらないといけないなと思っているのですが、運動会も新型コロナウイルスの影響から午前中で終わるため、旗頭をプログラムに入れるのが難しいです。せめて帰るときに見てもらいたいと思って、終了後に旗頭を上げているのですが、やはり保護者や児童が帰っていく中で演舞するのはあまりよくないと感じました。次年度はプログラムの中に入れようと思っています。

以前勤務していた学校では、旗頭クラブを担当教諭として立ち上げた経験もあり、個人的には旗頭の取組みはしっかりやりたいという気持ちはあります。以前の学校で、「旗頭は重い棒を揚げて力比べしているんじゃないんだよ、村の守り神を上げているんだよ」と、旗頭の知識と意識を子供たちに教えました。そうすることで、棒を跨いだりした時に、「神様の上を跨ぐのは駄目だよ」と注意すると納得していました。そういう意識の変化を実感したので、教師としてはそこから取り組みたいです。

ただ、現実的には、担当教諭を配置するのもにも試行錯誤しており、現在は地域の方のお力を借りるしかない状況です。

Q

以前勤務していた学校の旗頭クラブでは、クラブ活動の一環として立ち上げたとのことですが、

取り組む場合の運営の課題について教えてください。

A

旗頭クラブの活動自体は学校のカリキュラムに組み込まれていましたが、祭りや行事に出るとなると、保護者にも子供の送迎をお願いしないといけません。それでも子供たちが凄く旗頭に熱くなっていていれば、親も一生懸命サポートしてくれるので、特別私自身困ったということはありません。やっぴり楽しんでました思い出しかありません。

旗頭クラブは、最初の年は各クラブからもれた子供たちが集まっていた。希望のクラブから漏れて、じゃんけんに負けた子供たちが集まるクラブだったので、望まれたわけではありませんでした。ただ、旗頭がどういうものか、いかにこれがすごいのかという話をしていくと、だんだんと目つきが変わって燃えてくるんです。最後の運動会はずごく燃えていて、良い演舞ができたんです。そうすると、先輩たちの姿を見た子供たちが旗頭クラブに入りたいとなって、最後は一番人気のクラブになりました。やっぱり、自分がやっている事を理解したら子供も燃えるんです。何の説明もなく、ただ旗を揚げるだけでは面白くないですよ。自分がやっていることに意味が見いだせない、やっぱりそこを教えてあげられるかどうかですね。

学校側の地域芸能への取り組みについて

Q

学校で、地域芸能に関する取り組みはありますか？

A

今年度はSDGsの学習の一環として、自分たちが育った地域について学ぶ学習に取り組みました。しかし、旗頭も地域の伝統文化なのに、それに関わる学習が今年度はなかった事に気がつきませんでした。次年度も引き続き同様のプログラムを実施するので、高学年に旗頭の学習も組み込めたらと考えています。学ぶと旗頭をやりたくなると思います。旗頭の言い伝えや故郷の守り神であることなどを学んだ上であれば、子供たちも意欲的に取り組んでくれるのではないかと考えています。

後継者がいない、少ないというのはまさに課題だと感じています。課題をどうするかを考えるような授業づくりをできたらいいんじゃないかな、と話しながら思いました。

(2)地域芸能と学校の連携に関する課題と展望

Q

地域芸能と学校の関わり方については、課題や問題点はありますか？

A

一番の課題はやはり、働き方改革に伴う先生方の労働環境整備です。地域系のお祭りはほとんどが土日祝祭日です。クラブ活動などもそうですが、学校単位で行事ごとに参加すると、その対応に先生方を動かすことになってしまいます。それでも行ってくれる先生方には本当に感

謝しかありませんが、学校として配置しづらい状況はあります。

あとは、地域の一番大事なことを子供たちが良く知らないということ。私たちのころは、放課後は自分たちの地域を探検して遊びまわったりしたんですけど、今の子供たちはだいたい学童とかに行っていて、そこに集められて地域に居ないので、地域の様子もよく知らないまま、お父さんとお母さんが迎えに来るまで学童に滞在します。悪いとは言わないけれども、そういう側面が地域を知らずに過ごしていることになっていないかと危惧しています。今、地域で子供たちが歩いているのをあまり目にしないです。

Q

地域を知るきっかけになることは、旗頭の他にもありますか？

A

この地域は各町にいろんな旗頭だったり、獅子舞だったり、地域に根付いた伝統芸能があるので、それを学べる場があればいいと思うのですが、現在はありません。もっという子供たちはこの地域に町がいくつあるということも、多分答えられない気がします。

旗頭だけでも各町にあるので、それぞれの「とーるー」を覚えるだけでも興味が広がると思います。年間でいろいろな行事がなされていますが、もっと子供たちに知って欲しいです。相撲大会やしまくうとぅば大会も知ってもらい、参加して欲しいです。子供たちも習い事とか塾とか忙しくて難しいとは思いますが、個人的には色々な事を体験して欲しいです。

Q

学校には地域行事の案内や募集依頼などの掲示はありますか？

A

あまりないですね、相撲大会に参加しませんかという案内は来ますが、子供を通り越してくるんです。なので大会があることを子供はあまり知らないと思います。本当だったらポスターとかを目に付くところに貼れば、ちびっこ相撲大会などの参加も多くなると思います。そういう子供に対する広報はちょっと少ないかなという気がします。

Q

先生方の負担が増える中で、地域と学校をつなぐ人材がいたらと思うことはありますか？

A

これは助かります。地域連携担当が教員に割り振られるんですけど、授業もしながら地域とのパイプを開拓していくというのは、かなりの負担になると思います。もし学校からのリクエストに応じてくれる方がいてくれたら、地域連携担当教諭の負担も確実に軽減されると思います。負担というか、スムーズになるだろうなと思います。教諭がゼロから地域の人脈を作っていくことはさすがに厳しいかなと思います。色々なリクエストがあるんです。蝶々の勉強をしたいから地域で蝶に詳しい人いませんか？など、これを探すとすると、とても難しい業務になるんで

す。

Q

地域芸能と学校のこれからの望ましい形についてご意見を聞かせていただけますか？

A

地域芸能はやはりオンリーワンなので、子供たちには知ってほしいですし、守ってもらいたいし、できれば担い手になってもらいたいです。そこで学校は何を提供できるかと考えると、学習あるいは体験活動をカリキュラムの中に組み込んで、子供たちが学び、何年後かに学びが昇華されて繋がっていったらいいかなと思うんです。先ほど話した、旗頭に SDGs の学習で取り組んでみたらどうかというのも、その想いの一つなんです。

今年度、6 年生が琉球紙、芭蕉紙づくりに挑戦しました。戦後一度途絶えたいらしいのですが、それを復活させて琉球大学の先生方と協力して紙すき体験から行いました。完成した紙に万国津梁の碑文と名前を明記し「琉球王国印」のレプリカ印まで押して卒業記念紙として卒業式で子供たちへ渡しました。そういう取り組みはもっとたくさんあっていいと思います。

数百年前の知恵や歴史的な背景を感じながら現代で再現した琉球紙。学びを通じて数百年前に思いを馳せることを体験すると、きっと強烈にインプットされるはずです。学校としては地域の芸能、文化をどんどんカリキュラムに組み込んでいって、故郷の学習を 1 年から 6 年まで組み込むことが学校の使命かなと考えています。ぜひ卒業記念紙を見てください、印刷が大変でした。

まだこれからの話ですが、糸芭蕉を植えようかと思っています。4 年生の時に植えたら、2 年後に収穫できるので、卒業式に自分たちで紙すきできるという壮大な計画を検討中です。今後も学校と地域をつなぐカリキュラム作りは取り組んでいきたいです。

Q

地域と学校をつなぐために、例えば予算など、必要なものはありますか？

A

そうですね、予算があるといろんな学習の幅が広がります。

例えば現物を購入して学校で触れることができるようにするのもいいかもしれません。昔の道具を 3 年生で勉強した時に、シンメナービとかサギゾーキとかに博物館で触れるんです。地域に関連するそうしたものも現物で購入して、学校で飾られたら、子供が日ごろから目にできていいですね。予算があつたらいろいろアイデアも広がります。地域のものでもとても高いものもあります。子供が触れるとなると気を付けないといけないので、学習で触れられないのは勿体無いと感じます。

令和5(2023)年度 なは一と文化芸術事業
地域芸能と地域コミュニティに関するヒアリング 報告書

発行日:令和6(2024)年3月29日
発行:那覇市

編集・執筆:西平博人／長嶺一輝、林立騎、平岡あみ(那覇文化芸術劇場なは一と)

企画:那覇文化芸術劇場なは一と
制作:西平博人

©那覇市